

民舞の継承と発展とは？

大阪支部 前田雅章

1. 大阪支部舞踊プロジェクトの基本的な考え

舞踊教育でめざす子ども像

- ①リズムに乗って心地よく踊れる子ども。踊ることが好きで、また踊ってみたいと思う子どもに育てたい。それは、踊ることで心と体を解放できる子どもである。
- ②一人で踊るより友だちの中でうまくなり、友だちと心を通わせて踊ることが楽しいと思える子ども。
- ③舞踊を通して、民衆の心と願いがわかり、共感できる子ども。
- ④自分の踊りを客観化できる子ども。友だちと比較したり、鑑賞したり、教え合ったりする中で、動きなどを客観的に見ることができ子どもに育てたい。

舞踊教育でつきたい力

- ①踊りを分析する力
動きがどのような体の仕組みでできているかの理解。なれば、すて足、間合い、重心移動、足の運びや手の動きなどが分かる力。動きを覚える時には重要な力である。
- ②踊りを総合する力
新しい作品を覚えたり創ったりする時に自分なりに動きをイメージ化して身体を動かしていく力である。
- ③既成作品の中で自分らしい表現ができる力
動きの意味などを理解し、自分の心をたくして表現できる力。
- ④舞踊の歴史的背景がわかる力
社会的認識力。その踊りがどんな社会や生活の中から生まれ、どんな思いをこめて踊り継がれてきたのかなどを理解する力。
- ⑤発表会などを組織、運営する力。
踊りは自分達で楽しむだけでなく、他の人に見せることにも意味がある。実践の中で発表会を位置付け、子ども達に組織運営する力をつける。

2. 指導法について

①踊りの全体像をつかんで部分へ

初めて踊りを見て覚えていく時は、動きについていくだけで精一杯である。踊りの全体像がイメージできていないのに、最初から細部にわたって教えても学習者は混乱するばかりである。そこで、踊りの学習の過程を大きく分けた。

- (A) 動きを覚える段階
踊りの全体像を明らかにする。
- (B) 質を高める段階
強弱、視線の位置など細部について指導する。

(C) 構成する段階

発表会への演出、構成など行う。

踊って楽しいと思えるのは、動きを覚えて踊れるようになってからであろう。だから(A)の段階をできるだけはやくくぐらせ、(B)の段階に十分時間をかけて踊りこみをする。そうすれば踊る楽しさを味わいながら、自分らしい表現ができる。最後に、一人一人が、自分のものになった踊りを発表していくのは大きな喜びとなるだろう。それが(C)の段階である。

② (A) の段階の指導

最初に踊りの動きを覚える時、太鼓のリズムだけでは、なかなか覚えることができない。そこで、抽象的な動きを、できるだけイメージ化できる言葉に代えて指導していく。これを私たちは「動きの言葉化」と呼んでいる。それである程度覚えたら、太古や音楽とあわせていく。これをワンステップごとに繰り返しながら指導していく。学習スタイルはグループ学習を基本とする。グループ内でペア、トリオをつくり、お互いの踊りを見合う。このとき「動きの言葉化」が子ども達の教えあいの媒体となる。

③ (B) の段階の指導

踊りこみの段階だからといって、ただ漠然とたくさんの回数を踊るだけでは質の高い踊りにはならない。踊りこむ時に意識したり見合ったりする観点があると考え。それは、大きさ、動きの幅、緊張と脱力、間合い、視線などである。さらに、この段階で、踊りの専門家や現地の人などの優れた踊りを鑑賞させることも大切である。

④ (C) の段階の指導

表現活動は、人に見せることに意義をもつと考える。だから発表会は全体の中で大きな位置にある。その発表会に向けて、構成を考え、演奏し、衣装をつくり、自分たちの作品に仕上げていく。発表会の企画、運営なども子ども達の手で行いたい。

3. なぜ指導法なのか。

① 「お師匠さん方式」への疑問

かつて民舞をわらび座や現地の人などに教えてもらっても、なかなか覚えられなかった。一斉指導で、指導者の動きの模倣が中心。踊りに込められた気持ちとか精神を大切にされて、表現の技術（特に覚えるための技術）は教えてもらわなかった。

② 運動会だけの民舞からの脱却

民舞でも他のスポーツ教材と同様に「わかる」「できる」授業を行う。踊りの動きを分析したり総合したりしながら学習を進める。そのためには民舞のグループ学習を行う。

4. 現地で踊り継がれている作品だけでなく

現在大阪支部でも中野七頭舞の実践化に向け、その教材研究を行っている。しかし、現地で踊り継がれている踊りだけでなく、プロの舞踊家（集団）が創り上げた作品も取り上げ実践している。

それは、時代を反映したものであり、その中に高い芸術性があり、それが人々の心

を惹き付けるからである。

5. 大阪支部の実践

①運動会実践から→授業実践→総合学習

・踊りの背景にある歴史、願い、地域など、社会科との関連、衣装作りなど 家庭科との関連、採り物づくり太鼓作りなど図工との関連。

②民舞のグループ学習

③授業実践の発展として運動会を位置づける。

④運動会実践から地域・父母との交流

南中ソーランの実践

・大村実践「子どもが、保護者が、地域が変わる」

「学校崩壊」から学校再生へ

「徹底した管理ではなく、子どものやる気を引き出す、創造的で文化的な活動を通して学年を立て直すことを確認しあった。そしてその中心に「南中ソーラン」を位置付けた。

この実践が親を動かし「学び座」自主上映運動に、そして「青少年健全育成推進会」主催の映画会実現。

・大津実践「今こそグループ学習を！」

学年ぐるみでグループ学習に取り組む。

学年通信 グループノート

・伊藤実践「子どもをまん中にすえ父母と教師が連動して」

父母とともに取り組む。父母の踊る会も組織する。

・上野山実践「南中ソーランから日本文化へ」

たのスポ9月号

*学校五日制における行事精選の中（特に運動会）、「総合的な学習の時間」を最大限に利用し、総合学習としての民舞（舞踊）実践を展開してきた。そして、父母の熱い支持を受けている。

6. 大阪支部の疑問

・民舞の継承・発展とは？

「民俗舞踊の身体技能の継承を大切にしたい」「発展」とは、具体的にはどんなイメージの踊りなのか？

・今生きる子ども達が魅力を感じる「現代的なリズム」な踊りを研究・実践の大賞にしないのか？

・保存会の方の指導と学校教育の指導の違いは？